

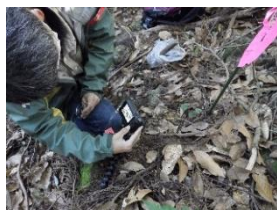
事業の背景・目的

ジュロウカンアオイとホロテンナンショウは紀伊半島のごく限られた場所にのみ自生するが、園芸植物としての価値が非常に高く盗掘（違法採取等）の恐れが極めて高い。また、登山道の整備や樹木の皆伐等による生息地破壊や生育環境の改変の恐れ、ニホンジカ等によるものと推察される食害もみられ絶滅の危機に瀕している。これらの危機を回避するためには、生息域外保全や代替地への移植・播種等の検討が急務である。そこで本事業では、自生地調査を行い、生息域外保全等を効率よく行うために必要な生育環境や生活史等の基礎的な情報の収集を行う。あわせて、生育環境の改変や盗掘を未然に防ぐため、市民の保全への関心を高めるよう普及啓発を行う。

事業の内容

事業① ジュロウカンアオイ保全事業

令和3年12月～令和4年2月の期間に、自生地にカメラを設置しジュロウカンアオイを食害する生物、訪花する生物の解明を図り、生育環境や気温等を調査した。



事業② ホロテンナンショウ保全事業

令和3年9月～10月の期間に、自生地にカメラを設置し、ホロテンナンショウを食害する生物を調査し、生育環境等を調べた。調査で得た情報を活用し保有する個体の生息域外保全を行った。



事業③ 普及啓発事業

花の文化園を利用する多くの来園者の目に触れるように園内ロビーにインフォメーションディスプレイを新たに設置、自生地調査の様子を放映し、利用者の保全への意識の醸成を図った。



得られた成果

- ・ジュロウカンアオイの自生地で確認された個体の多くでは、葉が矮小であり、欠損している個体も多く確認され、開花を確認できた個体はわずかであった。実生も全く確認することができず、現状では種子採取が難しい危機的な状況であった。
- ・設置したカメラでは、訪花生物を確認することはできなかったが、ニホンジカやヤマドリ等の出没を確認されたが、今回の調査ではこれら生物がジュロウカンアオイへ及ぼす直接的な影響を確認することはできなかった。
- ・ホロテンナンショウは、葉が破損した個体が確認された。また、ニホンカモシカがホロテンナンショウの葉を啜る様子と葉を蹴る様子が確認された。草食動物の採食圧がかかった植生の様子から、周辺の植物によるホロテンナンショウへの被覆が、採食により妨げられているという一面があることが推測された。その様子に倣い生息域外保全中のホロテンナンショウの栽培地周辺の樹木や草本の刈込を行い管理を行った。2月時の塊茎の大きさは前年度の径16mmから17mmになった。
- ・インフォメーションディスプレイにて放映した期間中に12,000人を超える入園者があり、多くの市民が保全への関心を高める機会となった。

